

〔資料〕

貞心尼自筆 龍海院藏雲和尚宛等書簡 翻刻・解題

田熊 信之

越州沙門大愚良寛の遷化を看取った聞法の徒貞心尼は、師良寛の遺徳の埋もれるのを哀しみ、師との間に唱和した和歌を綴り『者知須能露』（はちすの露）の一書を遺している。また、貞心尼は先師の遺墨、遺詠を集めて一本を編み残す願いも持っていたようである。これらのことは、貞心尼自筆の書簡や文稿によって確認される所であり、師の風光がこの尼僧あつて世に伝えられるに至ったことである。

こうした中、越後にゆかりをもった信濃穂高郡下高井村出身の禅僧謙巖藏雲は、巡錫、行脚する越後の各地で伝聞、目睹する先学良寛の風姿、遺墨に催され、その遺芳を留め、永く世に遺すことを自らの志願とし、その実現への歩みを進めることとなった。そしてその風姿を直に知る貞心尼等にしばしば面晤し、庵住の地国上等をも訪れ、後に篤実な貞心尼の奔走や同学の傑才覺仙坦山の支援を得て、慶應三年（一八六七）春に『良寛道人遺稿』の編書を江戸芝明神前の尚古堂から上梓するに及んでいる。

貞心尼と藏雲和尚間に取り交わされた書簡は、新潟の在地の研究者でもあつた上杉艸庵（法輪寺住職・法水涓潤）師や相馬御風氏をはじめに、木村秋雨（箱光庵住職・祖岳孝禪）師及び貞心尼の事蹟研究に心血を注いだ堀桃坡氏らによって紹介、採録されているが、その何れもが原蹟の掲出を欠いてしまっている。このため、録文の個々の是非を含めて精確な原蹟書影の提示が求め続けられることとなった。

筆者は、先に本誌第八八九号誌上で、新潟県燕市（旧、分水町）所在の良寛史料館所蔵の貞心尼自筆 前橋龍海院藏雲和尚宛書簡（複製本、原蹟所蔵者未詳）に拠つてその詳細を紹介しているが、その折共著者が附録として当時未見の原書簡類を堀氏の採録文のままに掲出している。

前橋龍海院第二九世となつていた藏雲和尚に宛てた貞心尼の自筆書簡類は、頭初藏雲和尚の手に保存されていて、その遷化後、唯一の嗣法の弟子である洞水覺山和尚の篋中に保管され、明治一年同和尚が出自地の越後に帰り刈羽郡平井村（現、柏崎市平井）の全性寺に普住するに及んで、先師の遺品と共に該地に運ばれ、また尔後普廣寺への転住に伴い、それらがさらに移蔵され、その後、火災で焼亡したのも半ばあつた如くであるが、覺山和尚の手中にあつた先師ゆかりの貞心尼からの書簡は、親しく交流した後学に贈与されて順次越後の各地に散蔵されることとなった。

この間の事情の一端は、上杉艸庵師が『越後タイムス』誌上に連載した「貞心尼雑考」の文章からも知ることが出来る。筆者も、本誌第九〇一号に、「海雲山人筆写『藏雲禪師遺稿』翻刻と解題」のもとに判明するところを記しているので、こちらも併閲して頂きたい。なお、貞心尼自筆の書簡は、その晩年の住庵地柏崎の関係者のもとに多数残されていたものもあり、それらも時と共に諸方に散じ所蔵されるに至っている。

さて、新潟県三島郡出雲崎町に所在する良寛記念館には、この開設に尽力した佐藤吉太郎（耐雪）氏、安田鞞彦氏ほか、またそのゆかりの方々から良寛遺墨、関連文書の寄贈があつたが、こうしたものの中に、貞心尼自筆の書簡を装潢した卷子があつた。

昭和四〇年、良寛生誕二〇〇年を記念して財団法人施設として設立された良寛記念館は、平成五年に出雲崎町管理の施設となり（同館は平成二八年九月に国登録有形文化財となった）、学芸員を配し、その展示、研究活動の体制を新たにしたことであるが、その後所蔵庫を点検する折にこの卷子を含むものが再確認され常設展示されるに至つたということである。



大珠山是字寺龍海院山門影
(前橋市紅雲町)



謙嚴藏雲和尚墓塔
(龍海院歴代住職墓地)



孝室貞心尼墓碑
(柏崎市常盤台 寶龍山洞雲
寺墓地)

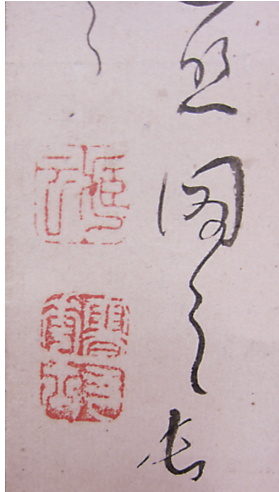
筆者は、偶々遍照圖、藏雲録書の良寛道人肖像(平成二十二年一月二〇日、安田鞞彦氏のご子息建一氏から寄贈され同館所蔵となった)の拝観のため昨年春同館を訪れ直にこれを観察させて頂いたことであったが、展示室に出陳中の貞心尼自筆書簡の存在を知り、次年夏、改めてこのものの詳細を同館の本間勲館長、永寶卓学芸員の両氏からご教示頂くこととなった。

この卷子には、龍海院藏雲和尚宛の書簡一通と某氏宛の書簡一通が収められている。同館の記録によれば、この卷子は、昭和五十一年七月八日に伊藤喜一郎氏から寄贈されたということである。この卷子は、五合庵の開基僧萬元の書簡三通を収めた卷子と良寛の実弟由之の書簡四通を収めた卷子とともに桐箱に収められた形で寄贈されたようである。同館には、寄贈者本人の経歴や寄贈の経緯などの記録は残されていないということであった。

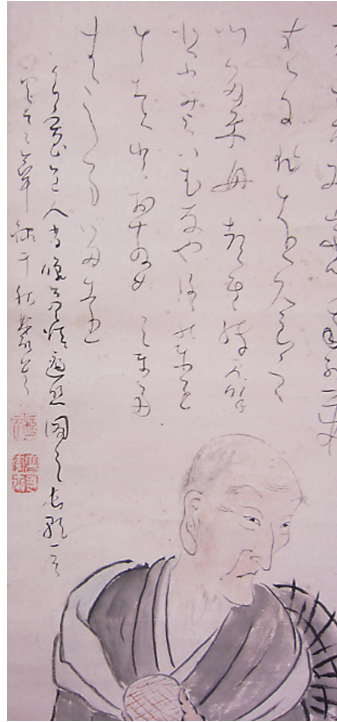
このため、この書簡を採録する堀桃坡氏の録文を見直し、文下に「三条一ノ木戸伊藤氏」と記されていたことをたよりに、この伊藤氏を探ることとなった。その結果、伊藤氏は、三条市一ノ木戸町で靴、衣料品店を経営していた伊藤喜一郎氏であり、呆庵の号のもとに歌人吉野秀雄氏に師事して和歌を詠作していた良寛の敬慕者であったことを確認することとなった。

後に伊藤喜一郎氏のご子息の夫人伊藤初枝様、及びその菩提寺正樂寺のご住職齊藤亮師のご教示を頂いたが、それにより、喜一郎氏が昭和五三年六月一四日に数え年八四歳で逝去され、亡くなる前々年に蔵品の一部を縁のある良寛記念館に寄贈していたことがわかった。喜一郎氏は、家業を営みながら、吉野秀雄氏等に感化を受けつつ良寛への敬慕の念を深め、その遺墨類の蒐集に精魂を傾け、自家の墓石にも良寛筆の名号を写刻し、宅側に五合庵を模した庵室を造り、吉野秀雄氏の長文の序を戴いた歌集『伊藤呆庵歌集』も出版していた人物なのであった。

さて、伊藤喜一郎氏寄贈の貞心尼自筆書簡二通一卷は、現在、他の二巻(先記の萬元書簡卷子、由之書簡卷子)と共に原田勘平氏の箱書のある桐箱に収められている。本誌で紹介する貞心尼自筆書簡卷子のみを記すと、このものは、檀木軸装で、卷子の天地幅は21cm、淡茶色の裂で装潢し見返しに雲母散らしの料紙を置きその後二通の貞心尼自筆書簡を配している。卷子の標に貼られた題簽は原田勘平氏の筆で「貞心尼書翰 式通」とある。



捺印部分
印文「藏云」(藏雲)(朱文)
「寒華玺印」(寒華璽印)(白文)



遍照圖、藏雲録書 良寛道人肖像(部分)
(良寛記念館蔵)(録書は良寛詠長歌)



良寛道人肖像収納箱
(相馬御風箱書(表)、
相馬御風跋書及び
安田靱彦識書(裏))



遍照圖、藏雲録書
良寛道人肖像
(全影)
(良寛記念館蔵)



『伊藤呆庵歌集』(題字は吉野秀雄氏書)



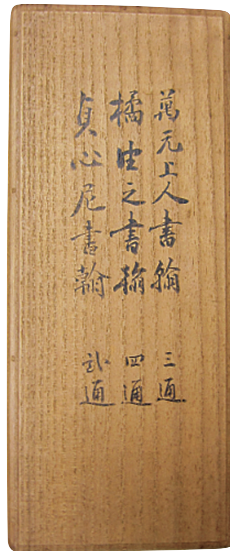
良寛道人肖像収納箱の部分
(前、後影)



貞心尼自筆書簡卷子影
(題簽書は原田勘平氏)



伊藤喜一郎氏寄贈三卷子収納箱
(箱書は表、裏共原田勘平氏)
(良寛記念館蔵)



与坂徳昌寺 良寛詩碑前の人士(部分)
(左から森哲四郎氏、吉野秀雄氏、伊藤呆庵氏)

第一に配された龍海院藏雲和尚宛の書簡は、天地幅16・8 cm、左右長112・5 cm（紙継ぎが二か所ある）、そしてこののちに少し離して配された第二の貴方様宛の書簡は、天地幅16・3 cm、左右長83 cm（紙継ぎが二か所ある）である。この二通の書簡の原状を推定するのは困難であるが、第一の藏雲和尚宛の書簡は、虫食いの痕が約14 cm間隔で見られることから、径4・6 cm程に末尾より巻き込まれて置かれていた時期があったことが推考される。第二の書簡は、前、中、後の用紙の継ぎと筆書内容にかかり、その筆書の時間差を想像させるところがあるようである。

本来個別であったこの二通の書簡が何時このように一卷子とされたのか、また伊藤氏はいつこの書簡を入手していたのかは不明であるが、堀氏の『良寛と貞心尼の遺稿』の文に、

「私は昭和三五年二月三日三条一ノ木戸町伊藤氏訪問、その所蔵貞心尼筆のものを得たのである。伊藤氏は之を既に記録した一通と共に巻物にして置かれた。……」（堀桃坡『良寛と貞心尼の遺稿』貞心尼書簡 その二）
三条市一ノ木戸町伊藤氏所蔵 「藏雲和尚への手紙 その二」後書 昭和三十七年七月一日 日本文芸社 278頁）

とあることから、原書簡を入手した伊藤氏が、卷子装に仕立て保存していた、とも解され、この入手が昭和三五年二月以前であったこと、萬元上人自筆書簡、橋由之自筆書簡もこの頃入手し、桐箱を設えて原田氏の箱書をも得ていたようにも推測される。

伊藤氏が生前に良寛記念館に寄贈した貞心尼自筆の書簡二通は、共に堀氏が伊藤氏宅で閲覧してその録文を自著に留めている。しかし、堀氏が

「原本には所々不明の文字があつて、相馬氏もその他之を適當だと思つて文字にして置いたようだから、私もそのようにしておいた。」（同前）

と綴る通り、判読不分明な文字があったことである。本稿では、その部位に十分な注意を払いつつ可能な限り原書に忠実に録文を記すこととした。

ところで、貞心尼自筆書簡二通のうちの卷子前面配置の第一通は、二か所で紙継ぎをした三紙の全長が112・5 cm（第一紙47・5 cm＋第二紙47・5 cm＋第



酒井忠顯公墓塔
（龍海院酒井家墓地）



酒井忠顯公位牌御厨子
（龍海院位牌堂）

三紙17・5 cm）の上州前橋龍海院第二九世謙巖藏雲和尚宛のもので、「良寛禅師の詩集上木」に関する藏雲和尚の志願を称賛する貞心尼の心緒と、「先年の石碑」建立の企図の経緯とその顛末、また藏雲和尚の退隱の希望への意見などが綴られている。

文中に「扱去年中ハ殿様御可久れ遊ハされ ……」とあることから、書簡の日付「や与ひ廿七日」は、藏雲和尚が住持する龍海院を菩提寺とした播州姫路藩主第七代（酒井雅樂頭家第15代に当たる）酒井忠顯公が二五歳で急逝した萬延元年（一八六〇、一〇月一四日が命日）の翌年、すなわち萬延二年が改元され文久元年（一八六一）となったひと月程後の日と考証される。当時、藏雲和尚は身軀に不調を来していた如くで、これに前後して療治のためと思われる温泉行を行なっており、心中に住持退隱も顧慮していた様子である。湯治のことは、書簡本文に書き添えられた「水晶山の水晶水尔て水晶身を浴し給ひし能知者春こや可仁奈良世給ひぬるよし承ハリ ……」との文に分明であるが、結局藏雲和尚は、病軀を抱えながら大寺の寺務に当り、志願の良寛詩稿の編書『良寛道人遺稿』の上梓も果たし、明治と改元された翌年の明治二年（一八六九）六月二日、夏安居が行なわれる中で世寿五七歳で遷化している。

なお、貞心尼が文辞を尽して「水晶山の水晶水 ……」と記している

藏雲和尚の入湯の地については、「水晶山」「水晶水」の語をたよりに藏雲和尚の住持地から北西約30kmほどに所在する上州吾妻郡中之条町の四万温泉を考慮することができるが、「水晶」の語を重畳させた表現は清浄さを示そうとした貞心尼の造語とも見え、実際の地名を記し含めていと断じ難いところもある。藏雲和尚は、故郷の近隣に足を運ぶこともあり、その地の温泉で浴治も行なっている。

巻子の後面に装置されている貞心尼自筆の第二の書簡は、「霜月四日」の日付で「貴方様 御毛とへ」と記されたものである。筆書年、宛先は何れも不明である。この書簡は、口語訳すると

「長く音信もないため思い出して詠んだ歌を、大工のやって来ました折に言伝えてようと思いましたが、事に紛れて忘れてしまいましたのを、今ついでがありますので、ご覧に入れ申し上げます。」

との書き出しをもち、「古巢に籠もる山時鳥」に擬え、久しく音信がない宛主を偲び、また、住み捨てられた隠寮（宛主がもとと居住していた隠居所を退去し新たな所に住み替わったことを示すようである）の庭に咲く朝顔を想像しながら詠んだ歌一首、さらに、粗末な草子を使りの印までに御覧に入れ申し上げますこと、近いうちの御出でをお待ち申し上げますこと、「本ん前」に出で来られぬことでありますなお聞かせ下さいとのこと、当方でも三八の会怠りなく人びと寄り合い面白い事でございますのでどうぞ君にも事情を繰り合わせ御出で遊ばされますようお願いいたしますのでどうぞ文中の「本ん前」の表記が果たして「盆前」であるのか否か不明にも見えるが、前接の歌に「時鳥」や「朝顔」が詠まれているのを見ると「盆前」と翻字するのが適切のようである。盆前に出そうとしていた手紙が事に紛れて日付の如く霜月四日になったと判読してよいのではあるまいか。

この第二書簡は、初めの第一紙（長22・4cm）と中間の第二紙（長39・6cm）及び末尾の第三紙（長22cm）が貼り継がれた形のものであるが、記述された内容から見ると、第一紙は貼り足されたかにも見え、旧来書きかけていたものの首部を取り去ってこれを付けて新たな書信にした可能性を推測させもする。第二紙と第三紙の継ぎ目がもとのもので第三紙が貼り替え

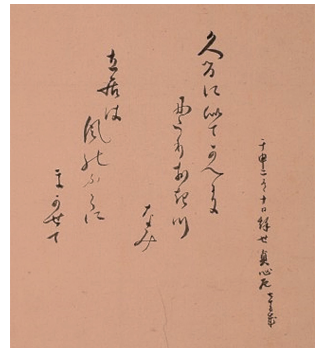
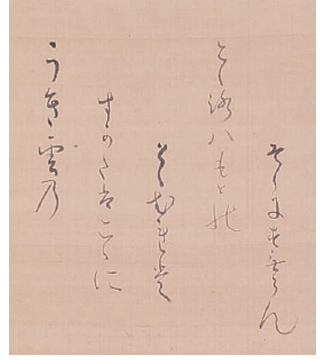
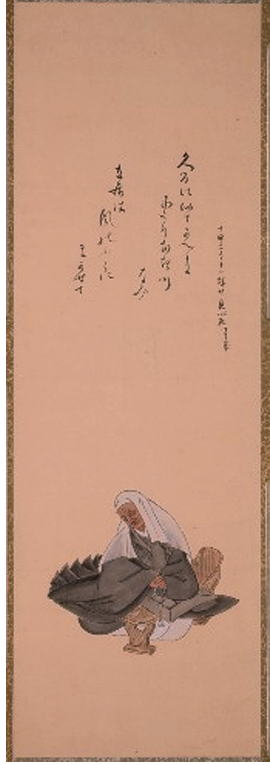
のものでないとするれば、日付の部位は当初は空白にされていたようにも思われるのである。時を経て書きかけのものを取り出しこれを整え書信として差出すにあたって新たに日付を書き込んではいなかったであろうか。

第二書簡の後半の初めの「此草子」の部位は「此菓子」と訓む人もあるようであるが、後文に「御覧ニ入」とあるように当該のものが「お目にかけるもの」であることから、「草子」と見るのが至当であろう。

「貴方様」と記される宛主は、貞心尼の不在中に焼失した釈迦堂のかわりに不求庵の建設に尽力した人物で、貞心尼の歌稿を『者知須能露』（はちすの露）と名付けた文雅の富家である、柏崎の菓種商山田家の当主で早く隠居して和歌や書画に親しんだ山田方寸翁静里（世碩、重弘、通称甚次郎）の可能性が高い。

貞心尼の自筆文稿『焼野のひと草』によれば、貞心尼は、嘉永四年（一八五二）卯月九日、「親の墓詣で」と「昔の友への訪い」を思い立ち、居所の柏崎の釈迦堂を出、故郷長岡の地に向かっている。久しく訪れなかった長岡では諸方を巡り、その月の廿一日に河内の高頭氏のもとに立ち寄り、近所の旧知をも訪ねている。不運にもこの頃、柏崎では大火が起り、釈迦堂が焼失してしまう。翌朝高頭家の下男の話しにこの大火のことを知った貞心尼は、驚き急ぎ、馬に乗って柏崎に戻って礎石だけになった釈迦堂を見る。住むこともできぬことを知った貞心尼は、そこでやむなく一時親しい知人の柳橋の関矢氏方に身を寄せ、一〇日ばかりを過す。そして関矢氏の話しもあって、五月初めに、その近地の無住堂、観音堂に移り、山田静里の支援を受け、破堂の修理や調度を整え、暫くの時を送っている。この後、静里をはじめとした知友らが貞心尼のために不求庵を新造したので、貞心尼は長月半ばにその新庵に移り住んでいる。

これらの経緯を考慮すると、第二書簡は、はじめ観音堂に移ったところに書き出され、慌ただしさの中にうち忘れ、時を経て新庵である不求庵に移り落ち着きかけた折に、書き差しを思い出して新たな部位と日付を加え、これを宛主に送り出したようにも想像される。第二書簡は、嘉永四年夏の盆前に書き出され、秋を越え冬の初めを過ぎて書き足され、霜月四日に山田静里に宛てて出されたものではあるまいか。



そら尔春無らん
こゝ路ハ毛と能
とゝむ連登
す可刀盤こゝに
うき雲乃

于申二月十日辞世貞心尼七十五歳
久留に似て可へる尔
丹刀利於起川
なみ
立居は
風能ふくに
ま可せて

照阿画 良寛禪師道影 (a) と貞心尼病中図肖像 (模本) (b)
(出雲崎良寛記念館蔵) (柏崎市立図書館蔵)
※賛は貞心尼詠歌 (a') (b')

凡 例
一 所掲写真は新潟県三島郡出雲崎町良寛記念館所蔵の卷子装「貞心尼自筆書簡」
二 通である。

二 原書簡の写真は良寛記念館のご配慮の下、平成二八年八月五日に筆者が撮影
させて頂いたものである。

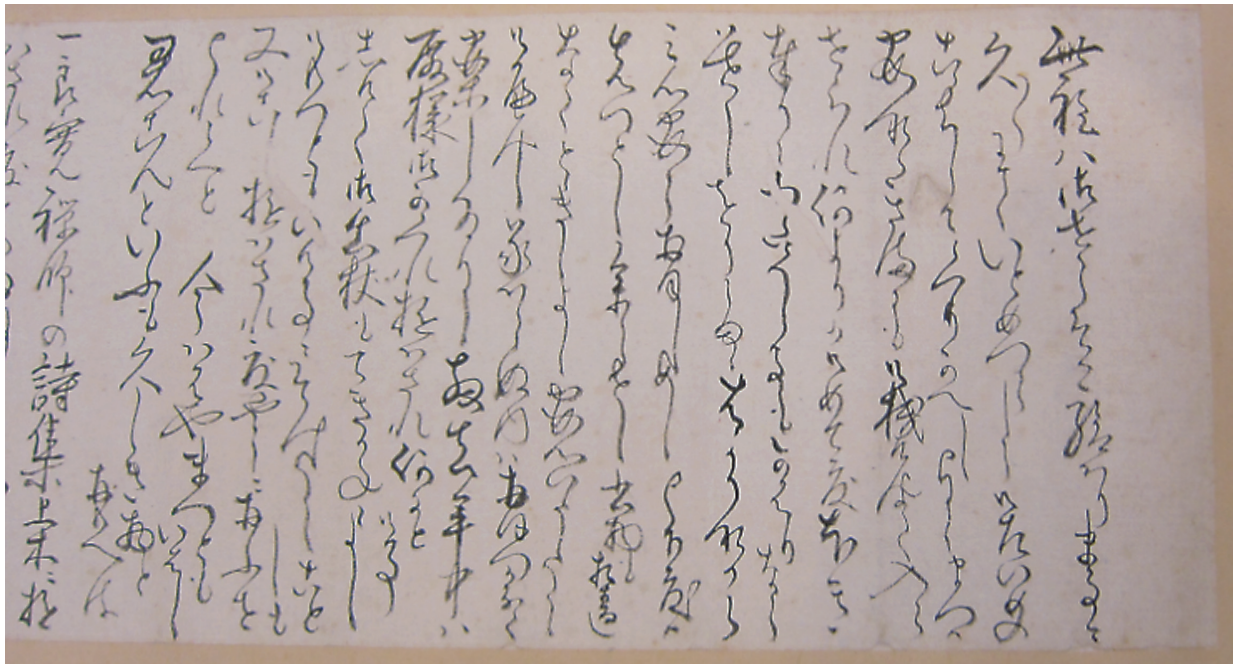
三 写真掲載にあたって、卷子装中の第一書簡をA、第二書簡をBとし、これを
各々誌面に合わせて切り分け、その左右の連接がわかるように端部を重複さ
せて掲出し、左下に通し番号を付記した。なお、書簡原紙面中の紙継ぎ部分
の下に↑を表示した。

四 原文採録に際しては、極力筆書の原である文字を用いることを心掛けたが、
一部通行の字体に改めたものもある。なお、上段に筆書通りの録文、下段に
これを私訓した書き下し文を示し、読者の閲読の便をはかった。

五 原文採録、釈読の不備、採録資料等の不足については博雅の諸賢のご斧正、
ご評訂をお願い申し上げたい。

*原書簡、及び関連の資料、また藏雲和尚の墓塔、酒井忠顯公の位牌の御厨子、
墓塔等の実査、撮影に関して、さらに伊藤喜一郎氏の閲歴の調査について、次
の方々から温なご理解と多大なご支援を頂いた。謹記して心からの御礼を申し
上げた。

新潟県三島郡出雲崎町良寛記念館館長 本間勲先生、同館館長代理・学芸員
永寶卓先生、新潟県燕市良寛史料館館長 西海土寿郎先生、群馬県前橋市龍海
院先代住持(三七世) 過外一雄夫人 美代様、同現住持(三八世) 過外章道師、
新潟県三条市正樂寺住持 齊藤亮師、新潟県三条市 伊藤初枝様、新潟県長岡市
森哲次郎様



A-1

貞心尼自筆 前橋龍海院藏雲和尚宛書簡等

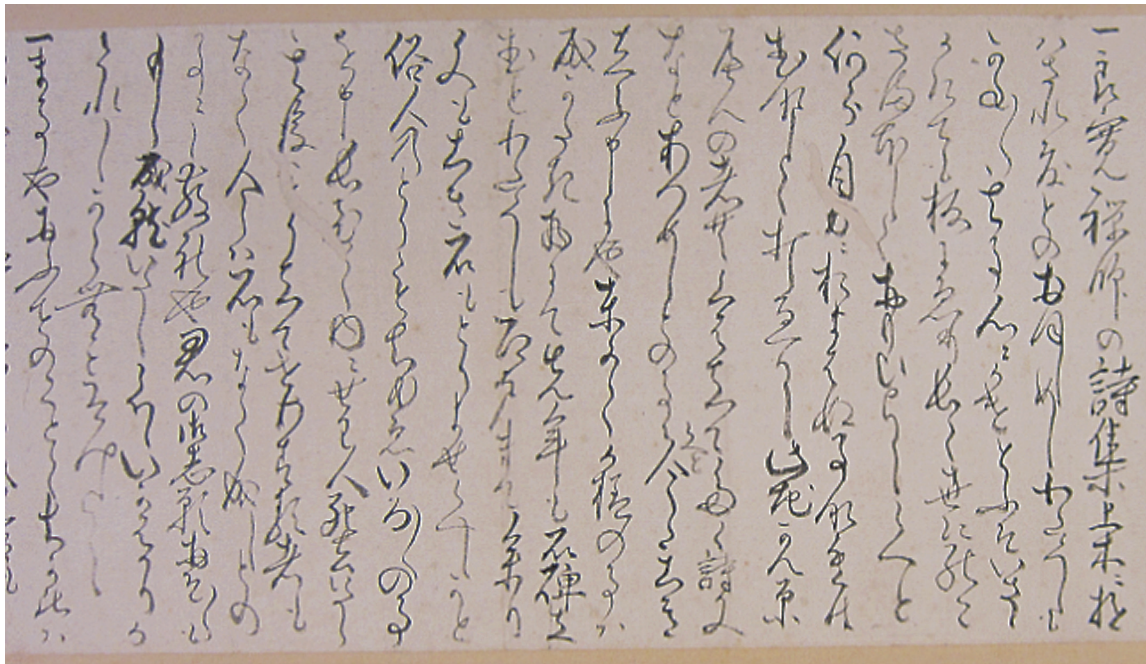
録文

此程ハ御世うそこ給ハリます事ニ
 久々爾天いとめつらしう御たいめの
 古々知して久利可へしまゐらせ候まつハ
 安那刀さ満尔も御機介んよく入ら
 世良れ何より可御めて度本き
 奉り候わ刀久し事も可者りなく
 暮しをり候満々者々可り那可ら
 ミ心安うお保しめし被下度候
 先つとし參らせ候書物も相違
 奈久と々きしよし安心い刀しまゐらせ候
 御遍んし承ハラぬ内ハお保つ可奈く
 案しゐまゐらせ候扱去年中ハ
 殿様御可久れ遊ハされ何可と
 御事
 志介く御出杖もてき可年候よし
 御毛つとも御事ニそんしまゐらせ候古と
 しも
 又御古し遊ハされ度やうニ於不世
 られ候へと 今ハ者やまつとも
 い者し
 君古んといふも久しき物と
 おもへば

貞心尼自筆 前橋龍海院藏雲和尚宛書簡等

私訓

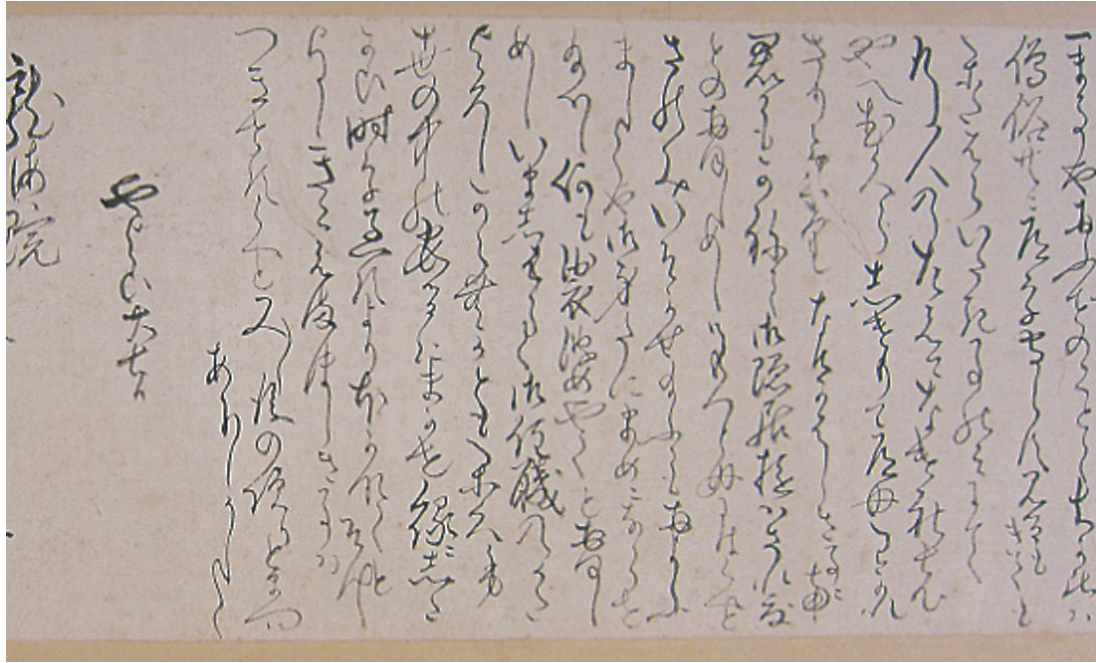
此程は御消息給はり誠に
 久びさにていと珍しう御對面の
 心地して繰り返し參らせ候先づは
 貴方様にも御機嫌よく入ら
 せられ何よりか御目出度祝ぎ
 奉り候私事も變りなく
 暮し居り候まま憚り乍ら
 御心安う思召し下され度く候
 先づ年參らせ候書物も相違
 無く届きし由安心致し參らせ候
 御返事承はらぬ内は覺束無く
 案し居參らせ候扱去年中は
 殿様御隠れ遊ばされ何かと
 御事
 繁く御出杖も出きかね候由
 御尤もの御事に存じ參らせ候今年
 も
 又御越し遊ばされ度やうに仰せ
 られ候へど 今のはや待つとも
 言はじ
 君來んと言ふも久しきものと
 思へば



A-2

一良寛禪師の詩集上木ニ遊
 ハされ度との思し召し私も
 かねがね其の事心に懸けどふそいさゝ
 かにても板に彫り長く世に遺
 さまほしく思ひ参らせ候へど
 何分自分に及ばぬ事なれば
 空しく打ち過参らせ候此の地蒲原
 邊の者共企て多く詩文
 等集めしとの事に候へど冬未だ出き
 立ち申さず候也とかくか様の事は
 成し難きものにて先年も石碑立
 むと私も江戸まで参り
 文も出き石も取り寄せ候いしかど
 俗人の取り持ちゆゑいろ／＼の事
 を申し長びく内に世話人死去致し
 其後取り立て世話する者も
 無く今は石も無く成しとの
 事に候されや君の御志願遅くも
 若し成就致し候はば如何許りか
 嬉しからむと存じ参らせ候
 一誠や仰せの如く近頃は

一良寛禪師の詩集上木ニ遊
 ハされ度との思し召し私も
 かねがね其の事心に懸けどふそいさゝ
 かにても板に彫り長く世に遺
 さまほしく思ひ参らせ候へど
 何分自分に及ばぬ事なれば
 空しく打ち過参らせ候此の地蒲原
 邊の者共久者立て多く詩文
 などあつめしとの事ニ候へど今刀出き
 立不申候也東可久可様の事ハ
 成可刀起物ルて先年も石碑立
 武とわ刀久しも江戸まで参り
 文も出き石もとりよせ候いし可と
 俗人乃とり毛知ゆゑいろ／＼の事
 を申し長飛久内ニせ王人死去い刀し
 其後とり立て世話春類者も
 奈久今ハ石も奈久成しとの
 事ニ候散礼や君の御志願おそくも
 もし成就い刀し候者ゝい可者可り可
 うれし可ら無とそんしまゐらせ候
 一ま事やお不世のこと久知可比ハ



A-3

僧俗共ニ道乎守ら須見留も
きくも

閑刀者らい刀起事能ミル天

行人乃たえて奈遣礼者

やへ武久ら志遣り天道母王可れ

さ利氣里 奈介可者しき事ニ

南

君耳も可祇天御隠居遊ハされ度

とのお保しめし御毛つと母尔は候へと

さ能みいそ可せ給ふニもおよふ

まし久や御身刀仁まめニ奈らせ

給ハ、何も娑婆や久とお保し

めしいま志者良久御住職乃可刀

与ろし可ら無可とも閑久毛

忝の中能安留仁ま可世縁ニ志刀

可比時乎過須より本可那久と

そんし

まゐらせ候きこえ満保しき事ハ

つき世須候へと又々後の便りとまつハ

あら〜可しこ

やとひ廿七日

僧俗共に道を守らず見るも
聞くも

片腹痛き事のみにて

行人の絶えて無ければ

八重葎繁りて道も分かれ

ざりけり嘆かはしき事に

なむ

君にも予て御隠居遊ばされ度

との思し召し御尤もには候へと

さのみ急がせ給ふにも及ぶ

まじくや御身だにまめにならせ

給はば何も娑婆役と思し

召し今暫く御住職の方

宜しからむかとも斯くも

世の中の在るに任せ縁に隨

がひ時を過すより他無くと

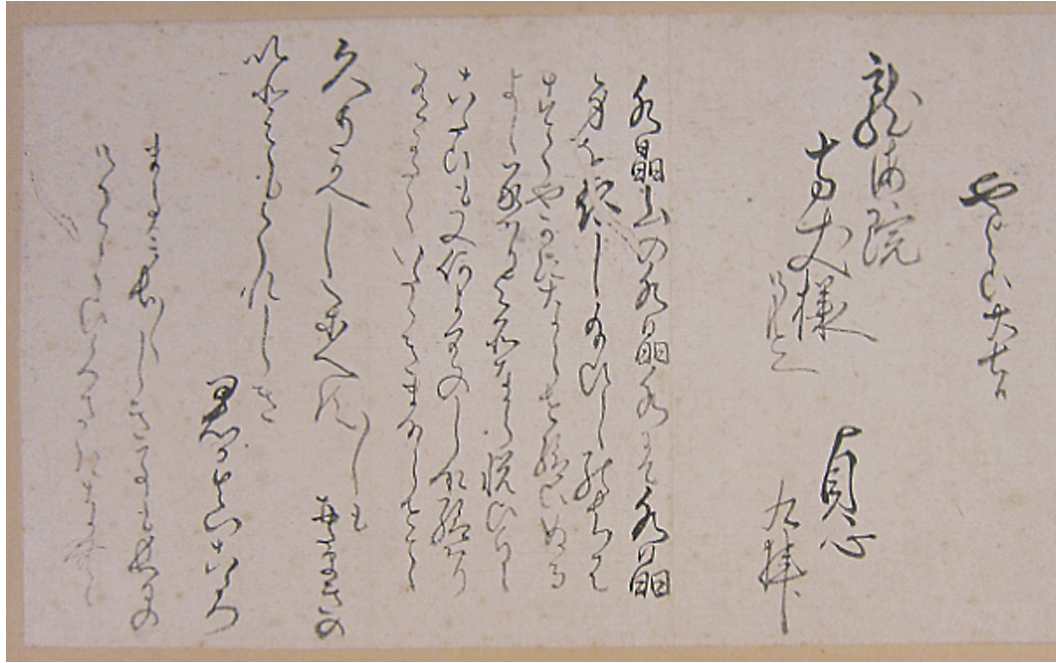
存じ

參らせ候聞こえまほしき事は

盡きせず候へと又また後の便りと先づは

あらあらかしこ

弥生廿七日



A-4

↑

龍海院

方丈様
御もとへ
貞心
九拝

水晶山の水晶水にて水晶

身を浴し給ひし能知者

春こや可仁奈良世給ひぬる

よし承ハリ与所な可ら悦びまゐらせ候

古刀ひも又何与里のし那給ハリ

有可刀くい刀ゝきまゐらせ天

久利可へし閑へ須 くも お刀まきの

以登もうれしき

君可真古ゝろ

ま事ニ長くしき事も長日の

御王らひ久さ仁な無

龍海院

方丈様
御もとへ
貞心
九拝

水晶山の水晶水にて水晶

身を浴し給ひし後は

健やかにらせ給ひぬる

由承はり他所ながら悦び参らせ候

此度も又何よりの品給はり

有難く頂き参らせて

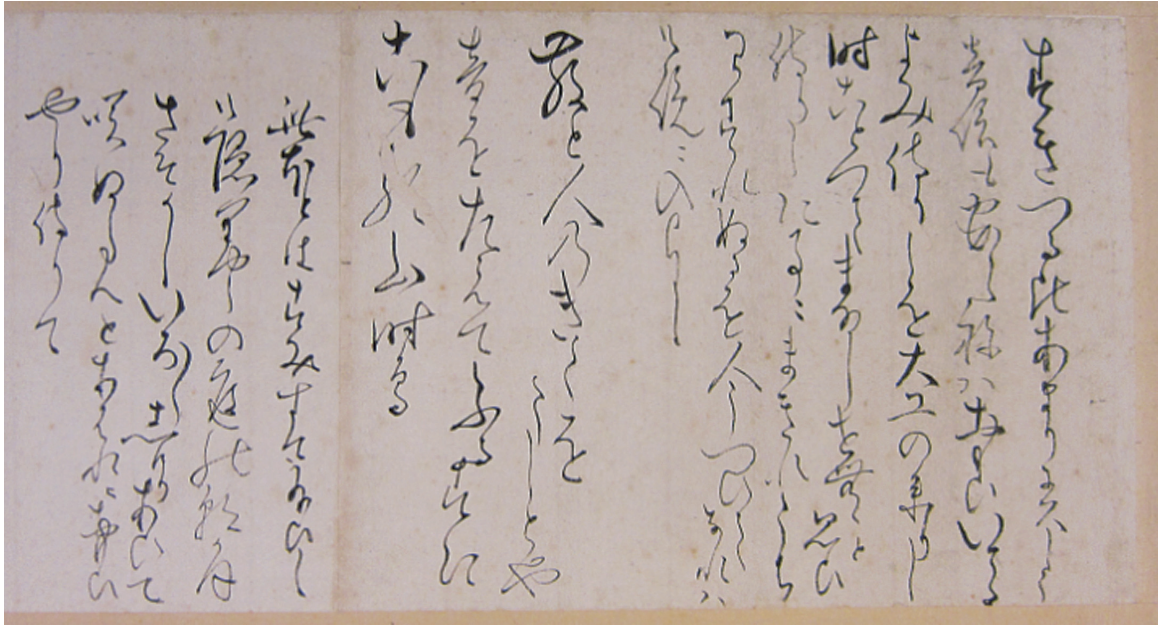
繰り返し返す 返すも 芋環の

いとも嬉しき

君が真心

誠に長ながしき事も長日の

御笑ひ種になむ

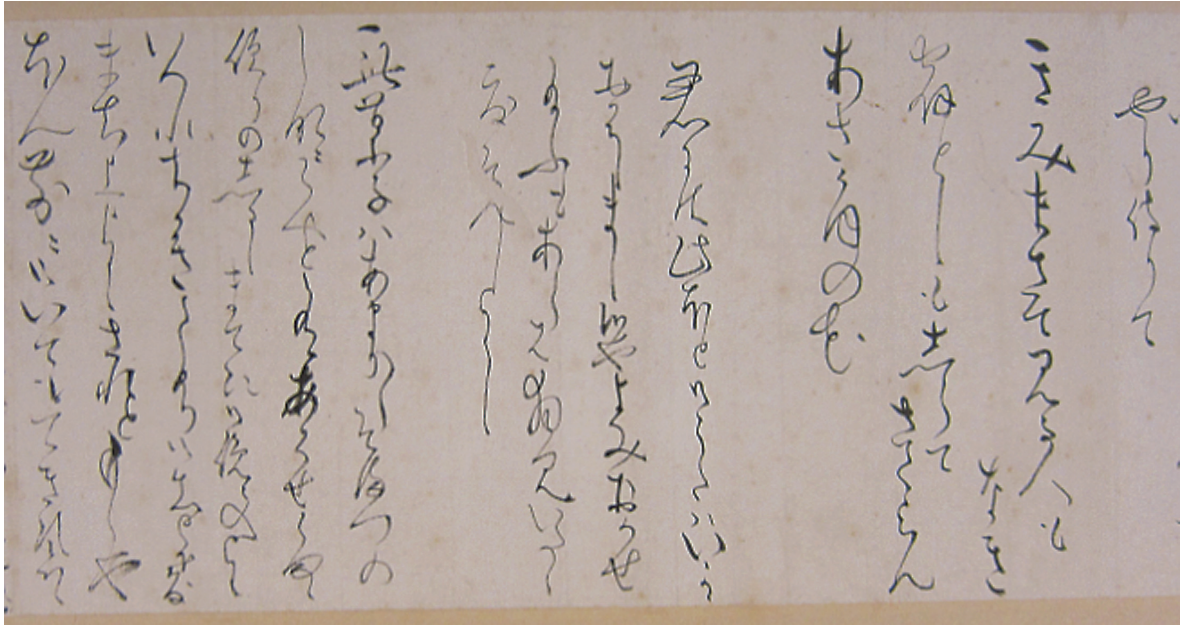


B-1



春きつる比あまり久しく
 音信も安ら祢ハ於毛ひい天、
 よみ侍りしを大工の参りし
 時古とつ天まゐらせ候
 思ひ
 侍りし仁事ニまきれうち
 王春れぬるを今ついで
 御覧ニ入まゐらせ候
 散と人乃き久を
 うしとや
 音をたえてふる春仁
 古も類山時鳥
 此本とは春みすて給ひし
 御隠里やうの庭能朝可保
 さぞ可しいろく志介りあひて
 咲ぬ良んとあ者れニおもひ
 やり侍りて

過ぎつる頃余りに久しく
 音信もあらねば思ひ出でて
 詠み侍りしを大工の参りし
 時言傳参らせむと
 思ひ
 侍りしに事に紛れうち
 忘れぬるを今ついで
 御覧に入参らせ候
 里人の聞くを
 憂しとや
 音を絶えて古巢に
 籠もる山時鳥
 此本とは住み捨て給ひし
 御隠寮の庭の朝顔
 さぞかしいろいろ繁りあひて
 咲ぬらんとあはれに思ひ
 やり侍りて



B-2

きみまさで見る人も
なき

宿としも知らて
さ久良ん

あさ可保の花

君尔は此本と御う刀ハい可
お者しまし候やよみお可せ
給ふもあら者拝見い刀し
度そんしまるらせ候

一此草子ハあまりくそ満つ
し那二候へと有あ者せ候満
便りの志るし
まで仁御覧ニ入まるらせ候
いつれ知可きう知御出被下度
ま知上まるらせ候されと毛しや
本ん前ニ御いてもてき須候ハ

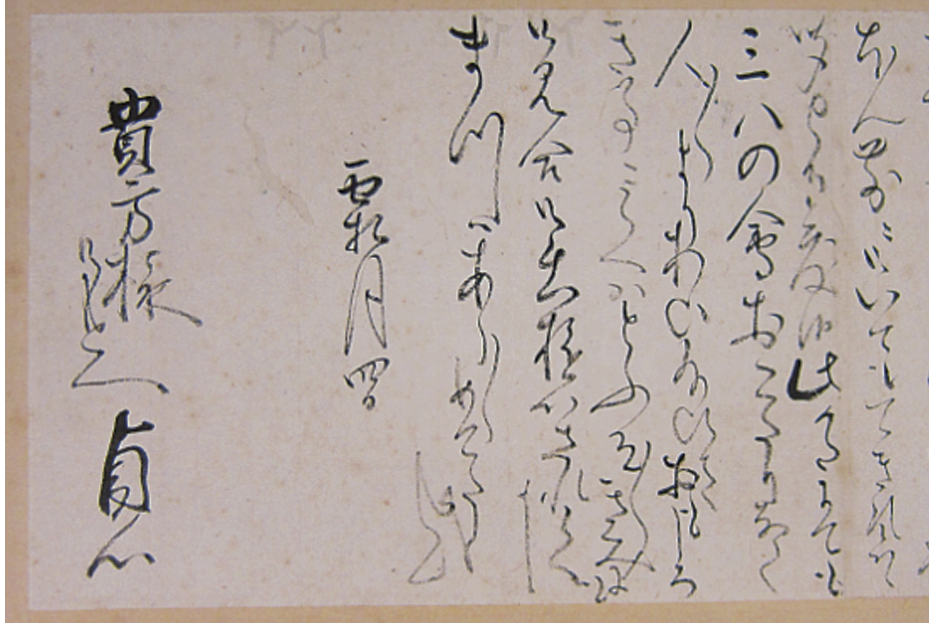
君まさで見る人も
無き

宿としも知らで
咲くらん

朝顔の花

君には此本と御歌は如何
おはしまし候や詠みおかせ
給ふもあらば拝見致し
度存じ參らせ候

一此草子は余りあまり粗末の
品に候へど有合はせ候まま
便りの印
までに御覧に入參らせ候
何れ近き内御出下され度
待ち上參らせ候されど若しや
盆前に御出でも出來ず候はば



B-3

↑

貴方様
御毛とへ
貞心

聞被下度候此可刀尔ても
三八の會おこ刀り奈久
人くよりあひ給ひ天おもしろ
き事二候へハとふそく
きみ尔も
御見合御出遊ハされ候へ
可し
まつハあらく
めて刀久
かしこ
霜月四日

貴方様
御許へ
貞心

聞下され度候此方にてても
三八の會怠りなく
人びと寄り合ひ給ひて面白
き事に候へばどふぞどふぞ
君にも
御見合御出遊ばされ候へ
かし
先づはあらあら
めでたく
かしこ
霜月四日

主要参考論著

- 秋叢菴主寒華子（謙巖藏雲）編『良寛道人遺稿 全』江戸 芝 尚古堂刊 慶應三年三月
- 原 坦山（覺仙坦山）著『鶴巢集』佛仙社 明治十七年四月二十日
- 釋 悟庵編『坦山和尚全集』光融館 明治四十二年十月廿五日
- 山本涓潤『星見天海老師の行狀』鴻盟社 大正五年三月二十五日
- 上杉艸庵『貞心尼雜考』（『越後タイムス』）昭和三年一月八日（六月十日）（中村昭三編『貞心尼考』柏崎良寛会 平成七年）
- 相馬御風『良寛百考』厚生閣書店 昭和十年三月二十日
- 相馬御風『良寛と貞心 一貞心尼全集』六藝社 昭和十三年七月十五日
- 燕 佐久太『良寛道人遺稿と藏雲和尚に就いて』（『跳龍』第四卷二號）昭和二十八年二月一日
- 燕 佐久太『良寛研究録（抄）』考古堂書店 平成十三年十月（原著は大正から昭和三十三年の執筆）
- 木村秋雨『良寛道人遺稿と謙岳藏雲和尚』（『良寛さま』特集 第叁號）昭和三十一年五月二十日
- 堀 桃坡『良寛と貞心尼の遺稿』日本文芸社 昭和三十七年七月一日
- 須藤春峰『原 坦山伝』株式会社 平活版所 昭和三十八年七月二十七日
- 伊藤呆庵『伊藤呆庵歌集』野島出版 昭和四十二年五月三日
- 高井蒼風『信濃崎人傳』一光社 昭和四十六年八月一日
- 原田勘平『良寛雜話』北洋印刷株式会社 昭和四十九年五月一日
- 木村秋雨『越後文芸史話』（ほくえつ選書4）北越出版 昭和五十年六月二十五日
- 安田建一編、加藤億一釈文・解説『良寛の書 一安田鞞彦の愛蔵品による』中央公論美術出版 昭和六十年七月二十日
- 新潟県曹洞宗青年会『曹洞宗新潟県寺院歴住世代名鑑』平成元年十二月八日

過外一雄『是字寺 龍海院誌』平成十八年八月二十二日

糸魚川歴史民俗資料館編『相馬御風宛書簡集Ⅲ 一芸術家・芸能人・出版者・教育者・宗教家の書簡』糸魚川市教育委員会 平成二十一年三月二十五日

細井瞳・田熊信之（資料）「貞心尼自筆 龍海院藏雲和尚宛書簡（複製卷子）翻刻・解題」（『学苑』第八八九号）昭和女子大学 平成二十六年十一月一日

田熊信之（資料）「海雲山人筆写『藏雲禪師遺稿』翻刻と解題」（『学苑』第九〇号）昭和女子大学 平成二十七年十一月一日

（たくま のぶゆき 日本語日本文学科）



『良寛道人遺稿』所掲 良寛道人肖像
 （肖像は藏雲和尚自筆の原画によると見られる）
 （拠 駒沢大学図書館蔵本）